次世代シニアと現在形シニア

その意識と行動

NEXT OLD ≠ NEW OLD

◎2020年を過ぎる頃から現在の50代は、65歳以上の高齢者の仲間入りをし始めます。今の50代が高齢者の仲間入りをすると超高齢社会はどのように変わるのでしょうか？また、高齢者にとっての幸せや生きがいとは、何なのでしょうか？

▼公益財団法人ハイライフ研究所では、この先の超高齢社会を見据えた研究を行う一環として50代から70代前半男女の生活行動、生活意識調査を実施いたしました。（調査概要を参照）。

▼ここでは、その調査結果の一部を連載コラムとしてご紹介いたします。

「次世代シニア（50代）」と「現在形シニア（60代後半から70代前半）」の年代間比較、男女間比較、ときにそのハザマとなる60代前半の特徴なども織り込みながら、それぞれの意識や行動をお伝えいたします。

▼また、「仮説的」な読み解きや、「一生活者」として感じた生きるためのヒントなども添えていきたいと考えていますので、ぜひご一読下さい。

公益財団法人ハイライフ研究所

＜ハイライフ研究所「次世代高齢者調査」調査概要＞
①調査対象　東京30km圏に居住する満51歳～75歳の男女
②標本数（有効回収数）500　51～55歳・56～60歳・61～65歳・66～70歳・71～75歳　男女計各100
③標本抽出法　エリアサンプリング法　④調査方法　留置法（訪問調査）　⑤調査時期　平成28年10月～11月

次世代シニアと現在形シニア

その意識と行動

NEXT OLD ≠ NEW OLD

第九回「お金」をめぐるシニアの現在。

第九回
「お金」をめぐる
シニアの現在。

◇◆調査対象・言葉の定義◆◇

次世代シニア（51歳から60歳）　現在形シニア（66歳から75歳）

■現在形シニアの平均世帯年収は、次世代シニアの約6割。
公的年金だけでなく複数の収入源をもつ現在形シニア。

■年代間で世帯年収に差はあるが、年収満足度では差がない。
現在形シニアは年収が低い分、支出も低くバランスしている。

■次世代で、増える通信・減る貯蓄。現在形で、増える医療・減る衣料。
年代を問わず増やしたいのは何といっても「貯蓄」。

■次世代・現在形シニア共「医療・介護費用」が今後特に必要。

■現在形シニアの保有世帯金融資産は次世代シニアの約2倍。
年代を問わず世帯で２種類強の金融資産を保有。

■老後のお金、これからを生きる次世代シニアにつのる不安。

■老後の準備資金を考え始めるのは次世代シニアの方が早い。
年金には頼れないと思い、老後のお金について考え始める。

■老後資金・必要額を考えるときは80代（前半・後半）までを想定。
だけど現状では必要額をあまり把握していない人が多数。

NEXT OLD ≠ NEW OLD

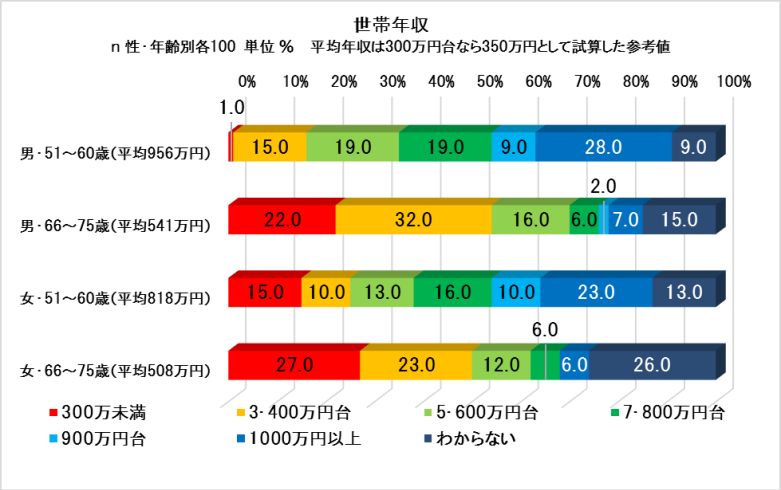
第九回「お金」をめぐるシニアの現在。

連載第九回は次世代高齢者調査より「家計・経済状況」に関する現状と意識について「現在形シニア（66歳～75歳）と次世代シニア（51歳～60歳）」を比較しながら、その実態をご報告をいたします。

1．現在の世帯収入・世帯支出

①最近1年の世帯年収

現在形シニアの平均世帯年収は、次世代シニアの約6割。



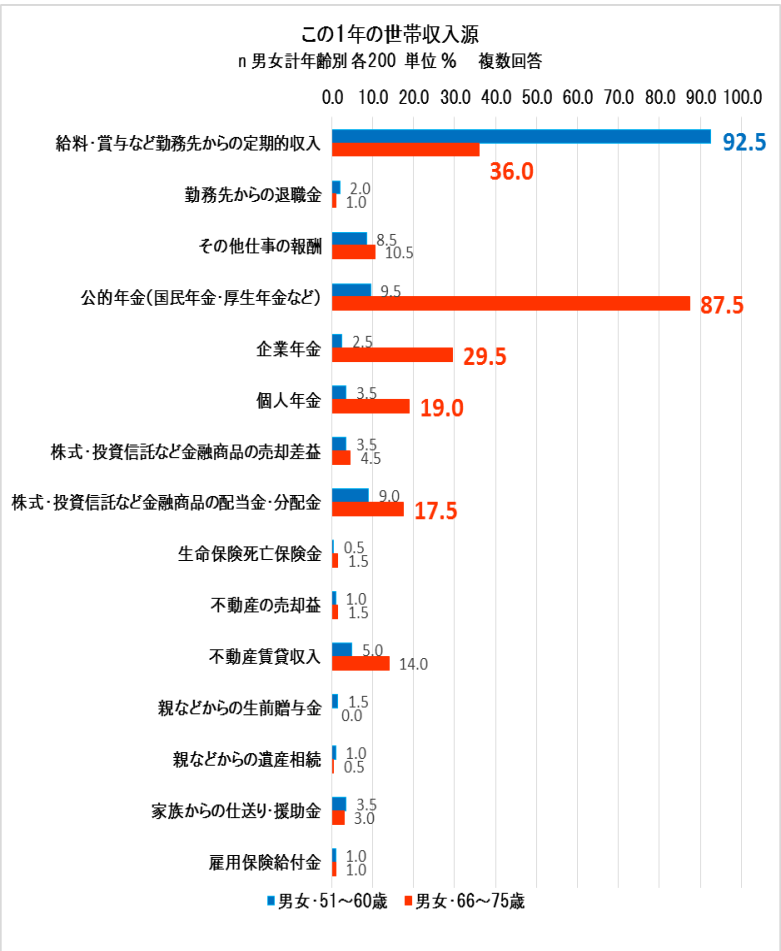
世帯平均年収は男女とも現在形シニアは次世代シニアより低くなっています。定年前の年代とリタイア組を含む年代の比較という事では頷ける結果ですが、ではどの程度の差があるのでしょう。左のグラフに記載の平均額を使い次世代シニアに対する現在形シニアの年収割合を算出すると男性の場合約57%、女性の場合で約62%と６割前後になります。

現在形シニアでは年収300万円未満の世帯、300～400万円台の世帯の多さも目立ちます。

視点は変わりますが女性・現在形シニアで「世帯年収額はわからない」という層が多いことが気になります。家族で情報を共有していない故の数字でしょうか。

②最近1年の世帯収入源

公的年金だけでなく複数の収入源をもつ現在形シニア。



世帯収入源には年代間で大きな違いがみられます。男女・次世代シニアは勤務先からの定期的収入など仕事の報酬に集約されます。あとは、一部（家族の）公的年金や金融商品の配当金・分配金がみられる程度です。それに対して男女・現在形シニアの場合は、公的年金（87.5%）を軸に、勤務先からの定期的収入（36.0%）、企業年金（29.5%）、個人年金（19.0%）、金融商品の配当金・分配金（17.5%）、など複数の収入源で世帯収入が構成されています。

公的年金のみで満足のできる生活を送るのは困難であり、収入を得る複数の手段を講じておきたいとの考えでしょう。仕事を続ける、金融投資で稼ぐ、不動産賃貸で収入を得るなど、それぞれの生活資源や暮らし方を反映させながら収入を得ている様が伺えます。

前項の「世帯年収入額はわからない」理由のひとつに「収入の複数化」も挙げられそうです。

NEXT OLD ≠ NEW OLD

③世帯収入の満足度

年代間で世帯年収に差はあるが、年収満足度では差がない。

前頁①でみた世帯年収額を大きく３階層にまとめ「収入額はわからない」を外し構成比を求めた結果が下表「世帯年収額」欄です。中間層「400～800万円」の構成比に大きな年代差はみられませんが「400万円未満」が現在形シニアで多いことがあらためて確認できます。

下表右側は「世帯年収の満足度」と年代間の差を示したものです。次世代シニアと現在形シニア間で世帯収入額に差があるにも関わらず（表の赤丸箇所）、世帯収入の満足度に関しては、男女ともに年代間の差はほとんどみられませんでした（表の緑丸箇所）。なぜそのようなことが起こるのでしょう。

（世帯年収額と世帯年収の満足度）

	世帯年収額				世帯年収の満足度	
	調査数	400万円未満	400～800万円	800万円以上	調査数	満足＋やや満足
次世代シニア男（51～60歳）	91	6.6	38.5	54.9	100	55.0
現在形シニア男（66～75歳）	85	51.8	32.9	15.3	100	57.0
次世代－現在形シニア 男		-45.2	5.6	39.6		-2.0
次世代シニア女（51～60歳）	87	21.8	29.9	48.3	100	59.0
現在形シニア女（66～75歳）	74	55.4	33.8	10.8	100	59.0
次世代－現在形シニア 女		-33.6	-3.9	37.5		0.0

④世帯の月平均支出と収支バランス意識

現在形シニアは年収が低い分、支出も低くバランスしている。

前項の疑問は「収入と支出のバランス」意識で説明が付きます。現在形シニアの月間支出額は、30万円未満が半数を超えてますが「支出が収入を上回っている」つまり赤字と認識している人の割合は次世代シニアと大差ありません。要因としては、次世代シニアが「教育費」や「住宅ローン」といった大きな負担から未だ解放されていないことや、現在形シニアにおいては、子どもの独立などで世帯人数が減り、一人当たり年収に換算すると見た目ほどは差がないことなどが考えられます。

（月間支出額と収入支出バランス意識）

	月間支出額				収入と支出のバランス			
	調査数	30万円未満	30万円台	40万円以上	調査数	収入が上回っている	同じ位	支出が上回っている
次世代シニア男（51～60歳）	91	28.2	22.4	49.4	100	31.0	38.0	16.0
現在形シニア男（66～75歳）	85	50.0	30.5	19.5	100	27.0	48.0	19.0
次世代 － 現在形シニア 男		-21.8	-8.1	29.9		4.0	-10.0	-3.0
次世代シニア女（51～60歳）	87	28.4	34.1	37.5	100	36.0	31.0	29.0
現在形シニア女（66～75歳）	74	56.6	25.3	18.1	100	29.0	40.0	23.0
次世代 － 現在形シニア女		-28.2	8.8	19.4		7.0	-9.0	6.0

NEXT OLD ≠ NEW OLD

2．最近の増減支出費目と今後の重点増減費目・今後必要となる費用

①この１～2年で増えた支出、減った支出

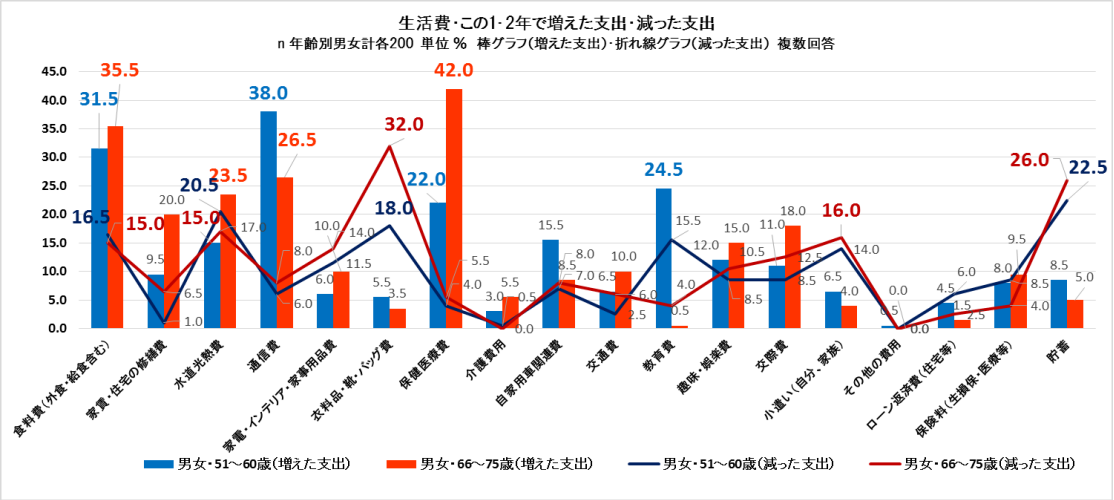
次世代で、増える通信･減る貯蓄。現在形で、増える医療･減る衣料。

増えた支出は男女・次世代シニアでは通信費（38.0%）、食料費（31.5%）、教育費（24.5%）の順。同・現在形シニアでは、保健医療費（42.0%）、食料費（35.5%）、通信費（26.5%）の順となります。保健医療費と教育費には年代的要素が、通信費、食料費には時代的要素が反映されています。

減った支出は男女・次世代シニアで、貯蓄（22.5%）、水道光熱費（20.5%）、衣料品類（18.0%）。同・現在形シニアでは、衣料品類（32.0%）、貯蓄（26.0%）、小遣い（16.0%）の順となります。

貯蓄、衣料品、小遣いなどは増加した別の費目の影響で減らさざるを得なかったと思われます。

なお「貯蓄」を支出と分類することに違和感をお持ちの方は可処分所得から消費支出を引いた分とご理解下さい。



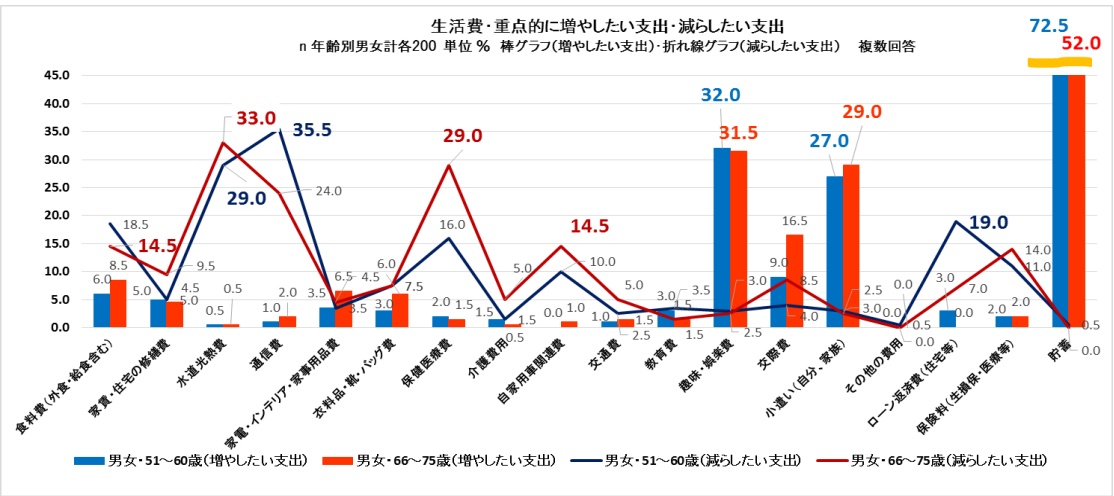
②今後重点的に減らしたい支出、増やしたい支出

年代を問わず増やしたいのは何といっても「貯蓄」。

今後重点的に増やしたい支出は男女・次世代シニアでは貯蓄（72.5%）、趣味・娯楽費（32.5%）、小遣い（自分・家族）（27.0%）の順、同・現在形シニアでも1位は貯蓄（52.0%）、以下、趣味・娯楽（31.5%）、小遣い（自分・家族）（29.0%）と続きます。

減らしたい支出は男女・次世代シニアで、通信費（35.5%）、水道光熱費（29.0%）、ローン返済費（19.0%）の順。同・現在形シニアでは、水道光熱費（33.0%）、保健医療費（29.0%）、通信費（24.0%）の順となります。

増やしたいのはなんといっても貯蓄、そして小遣い。減らしたいローン返済と保健医療費には年代的特徴が表れています。



NEXT OLD ≠ NEW OLD

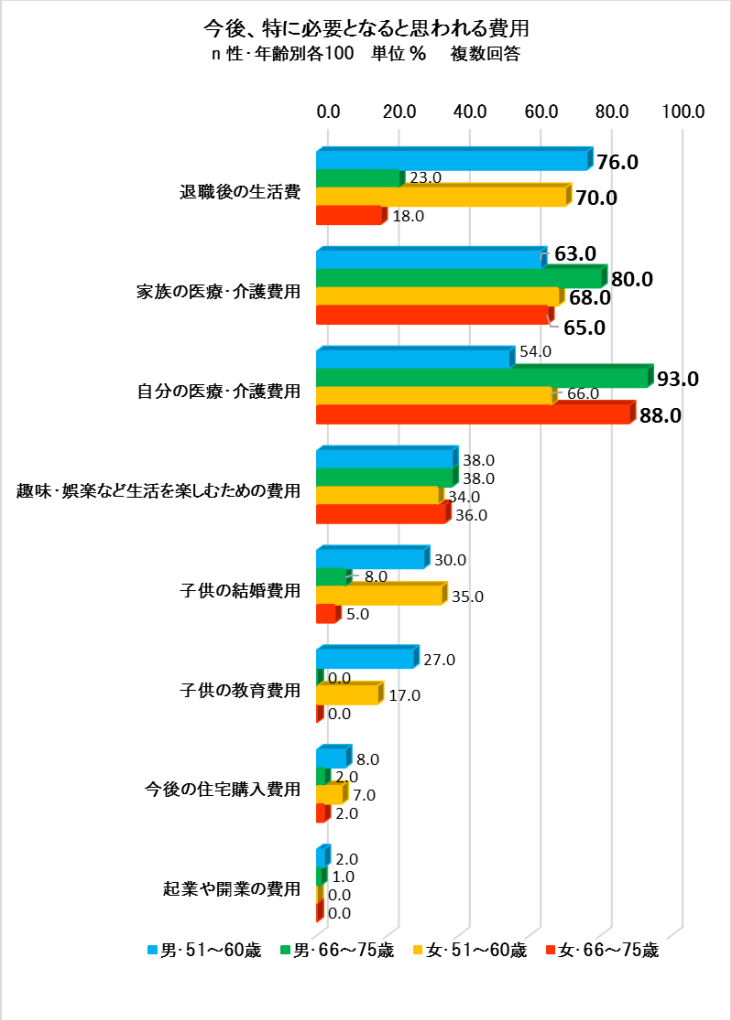
③今後、特に必要となる費用

次世代・現在形シニア共「医療・介護費用」が今後特に必要。次世代シニアではプラス「退職後の生活費」。

次に「今後、特に必要となる費用」をどう捉えているのかみていきましょう。これは、前述の支出に関する質問とはやや趣きを異にしたもので、老後など「これからの人生の準備資金」の使途と意識されているものと考えて下さい。年代間で10%以上の差のある費用は以下の通りです。

■「次世代シニア」のほうが「現在形シニア」より高い■
（男性・女性）
・退職後の生活費（男性53%差・女性52%差）・子どもの結婚費用（男性22%差・女性30%差）
・子どもの教育費用（男性27%差・女性17%差）
■「現在形シニア」のほうが「次世代シニア」より高い■
（男性・女性）
・自分の医療介護費用（男性39%差・女性22%差）
（男性）・家族の医療介護費用（17%差）

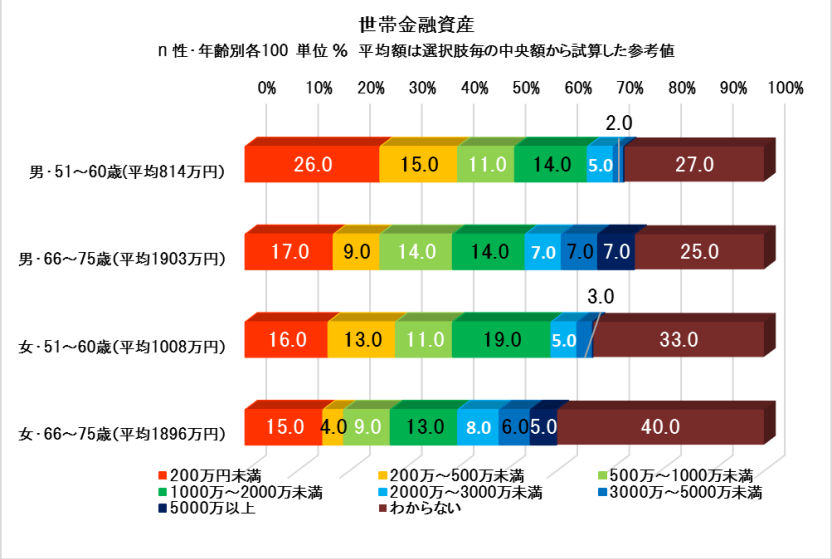
就労者ならほとんどが定年前の年代ゆえ、次世代シニアはその先にある未知の領域の「退職後の生活費」が最も気になるところです。年代を問わず「医療・介護費用」は「特に必要となる費用」として認識されています。また各層3人に1人は「趣味・娯楽など生活を楽しむための費用」を挙げています。人生の後半戦において、生活を楽しむ消費は「必需」といっても過言ではないと感じているのでしょう。少ないものに目を向けると、既に住宅を取得している人が多いため「今後の住宅購入費用」はごく僅か、仕事を続ける場合は再雇用や再就職を考えている人が多いので「起業・開業費用」もごく僅かとなっています。



３．資産

①世帯金融資産額

現在形シニアの保有世帯金融資産は次世代シニアの約2倍。



世帯平均金融資産額は年収とは逆に男女とも次世代シニアが現在形シニアより低くなっています。左のグラフに記載の平均額を使い次世代シニアに対する現在形シニアの世帯平均金融資産額の倍率を算出すると男性の場合約2.3倍、女性の場合で約1.9倍と2倍前後になります。

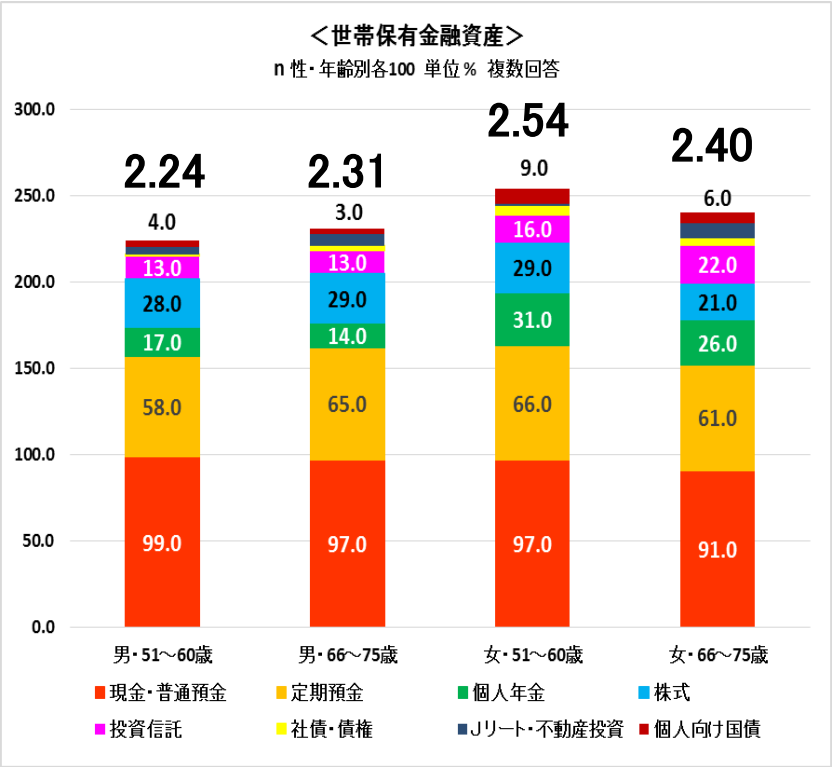
そして気になるのが男性・次世代シニア層の26%が200万円未満と回答していることです。「わからない」を除外して構成比を算出すると35.6%と3人に一人になります。

同様に1000万未満を合計すると71.2%となります。

金融資産額の分布とは別に、年収以上に目に留まるのが「わからない」です。金額区分別を抑え、最も多数を占めており、女性・現在形シニアにおいては4割に及びます。

②世帯保有金融資産の種類

年代を問わず世帯で2種類強の金融資産を保有。



世帯金融資産としてどのような種類のものを保有しているかを聞きました。左の図はその結果を性・年齢別積み上げグラフにしたものです。金額に関係なく多くの種類を保有していれば高い棒になります。グラフの上部の数字が平均所有種類数ということになります。

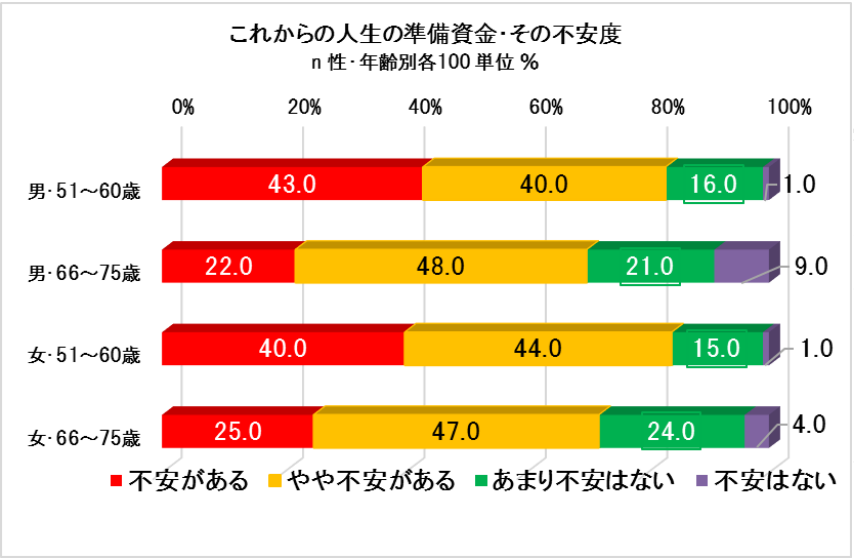
各層に顕著な差はなく、2.2から2.5種類の幅にあります。

「現金・普通預金」はほとんどの世帯で、「定期預金」は6割前後の世帯で所有されています。グラフの緑色で示した「個人年金」は女性の方がやや高い率を示しています。

資産額で勝る現在形シニアですが資産の種類数という点では次世代シニアと大きな差はなさそうです。次世代シニアは世帯年収面では高い水準にあること、今後必要となる費用として「退職後の生活費」が意識されていることから、個人年金や株式、投資信託などの金融商品に接し、資産形成に努めている姿が浮かびあがります。

①これからの人生の準備資金・その不安度

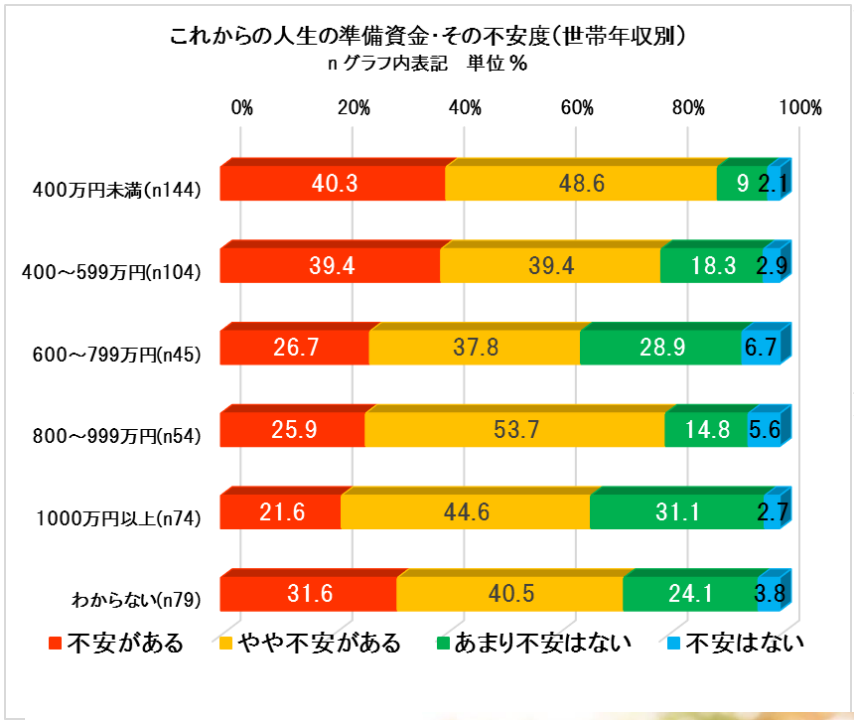
老後のお金、これからを生きる次世代シニアにつのる不安。



老後など「これからの人生の準備資金」について不安の有無を4段階で聞いたところ「やや」を含めると性・年齢を問わず7割以上の人が不安を感じています。どうなるかわからない不確実な将来のこと、無理ありません。多数派「やや不安」には「どちらともいえない漠たる不安」層が多いと思われます。となると「不安がある」と言い切る人たちの中に切実なものがあるのではないでしょうか。

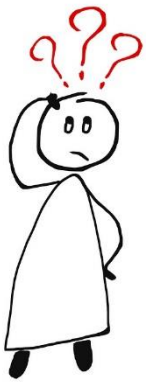
次世代シニアに多くの「不安がある」人たちが見出せます。定年などの変化が迫り将来が気になりだしたという年代的要因だけでなく、年金にはますます頼れなくなるという世代的・時代的要因が将来不安を押し上げています。高齢になって仕事をする意思は充分持ち合わせていても、もし働けなくなったら・・不安の種はつきません。

「だけど大丈夫！」とエールを送りたい気持ちになります。



下のグラフは同じ質問を世帯年収別にみたものです。年収が相対的に低い区分の層の「不安がある」率が高くなっています。

1-③の世帯年収の満足度にみる年代間での年収額に対する捉え方の差を考慮すると、年収区分の低い次世代シニアの不安が多く含まれていると推察できます。

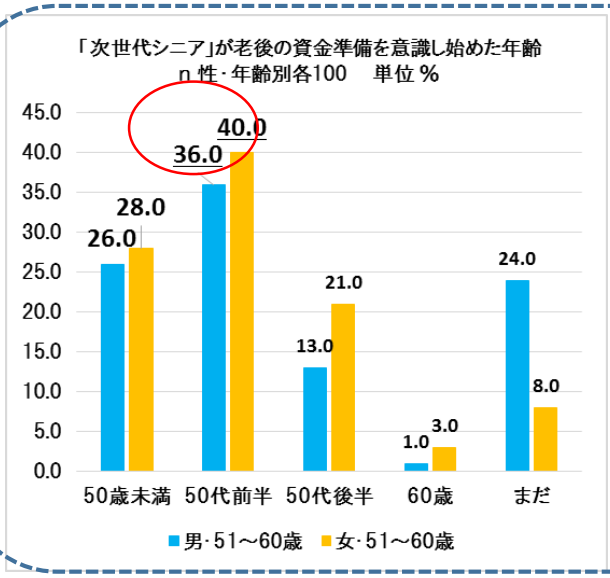


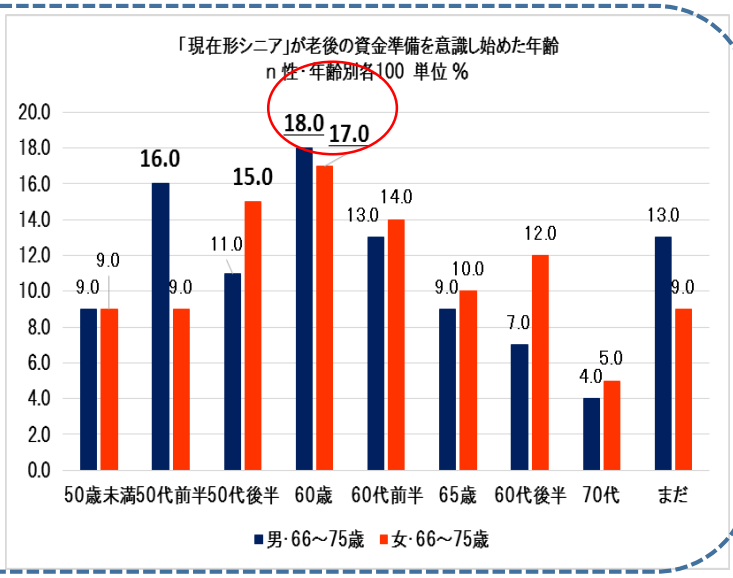
②老後の準備資金を意識し始めた年齢

老後の準備資金を考え始めるのは次世代シニアの方が早い。

「老後の準備を意識してお金について考え始めたのはいつ頃からか」を聞いた結果が下の二つのグラフです。次世代シニアでは男女とも「50代前半から」が最も高く、「50歳未満から」がそれに続きます。グラフにはありませんが、対象者を50代前半男女に絞ると「50代未満から」が39%と増えます。逆に対象者を50代後半男女に絞り「50代未満+50代前半から」をみても54%と半数以上になります。

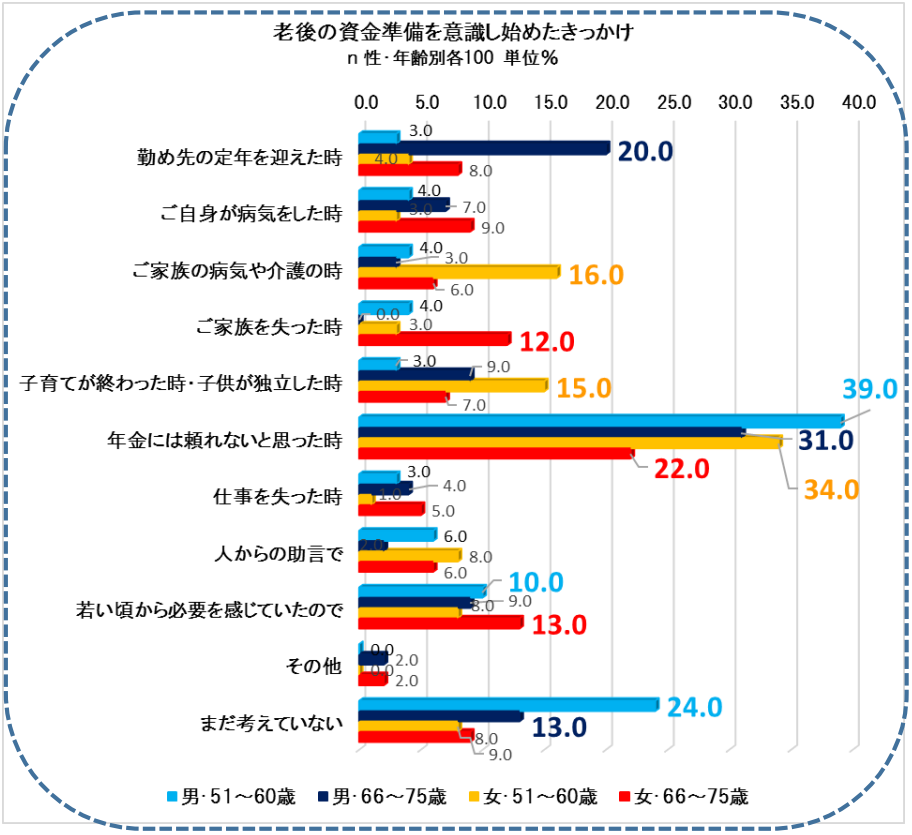
それに対して現在形シニアの場合60歳を中心にヤマがあります。思い浮かべる年齢の幅が広いので単純比較できませんが、次世代シニアの方が早くから意識せざるをえない現実がみてとれます。





③老後の準備資金を意識し始めたきっかけ

年金には頼れないと思い、老後のお金について考え始める。



では「意識し始めたきっかけ」は性・年齢を問わず「年金には頼れないと思った時」が最も多くなっています。2番目は－

次世代シニア男性⇒若い頃から必要を感じていた
同　女性⇒家族の病気や介護
子供が独立、など
現在形シニア男性⇒定年を迎えた時
同　女性⇒若い頃から必要を感じていた
家族を失った時

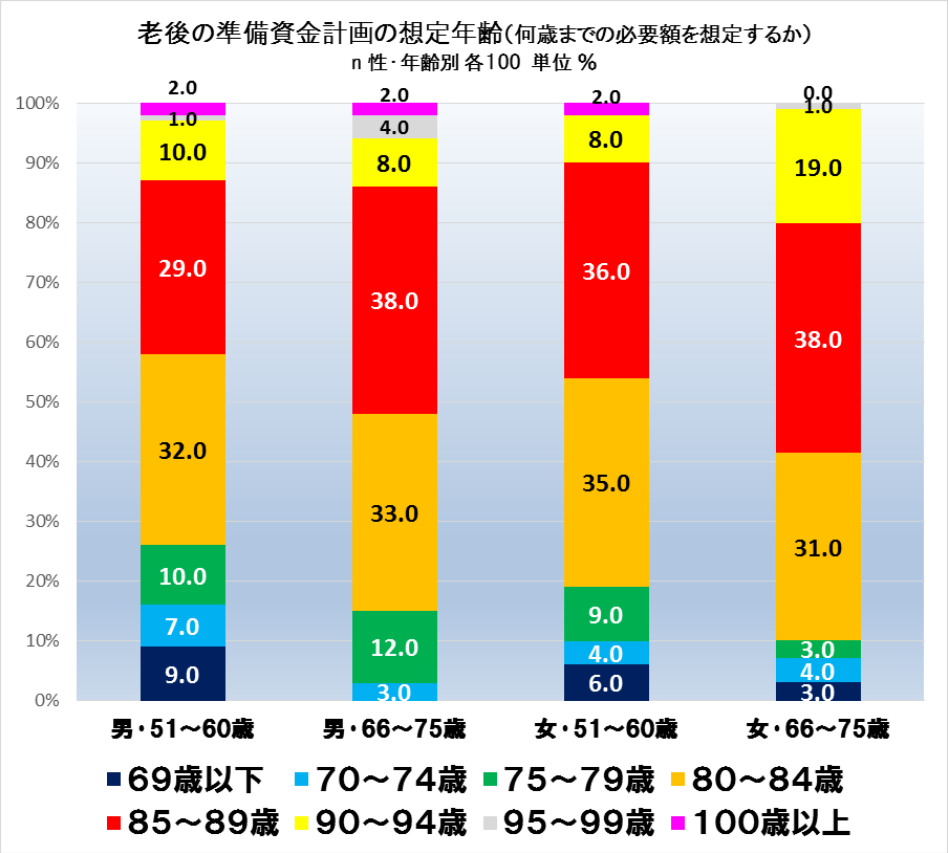
となっています。

次世代シニア男性の「まだ考えていない」の多さも目立ちますが、それを含め男性は定年など『仕事』の変化、女性は『家族』の変化がきっかけとなるケースが多いようです。もちろん「年金には頼れない」以外では。

NEXT OLD ≠ NEW OLD

④老後の準備資金を想定する年齢と必要額の把握について

老後資金・必要額を考えるときは80代（前半・後半）までを想定。だけど現状では必要額をあまり把握していない人が多数。



老後など、これからの人生の準備資金計画を立てるとしたら何歳までの必要額を想定するかを聞いてみました。性・年齢を問わずに「80代前半・後半」が多数を占めました。各年齢階層の中間値を元に平均年齢を算出すると

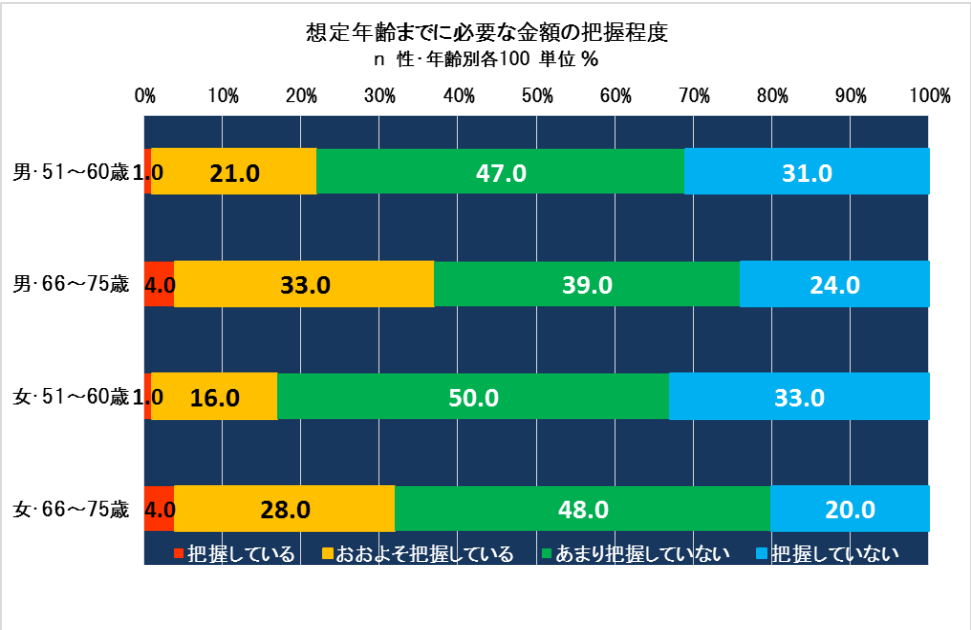
次世代シニア男性　81.8歳
現在形シニア男性　85.3歳
次世代シニア女性　83.0歳
現在形シニア女性　85.1歳

となります。

90代を想定する人の存在も現在形シニアの20%をはじめとして見逃せません。まさに長寿化です。

現在形シニアのほうがやや想定年齢が高いのは祈りか実感か。

ちなみに「平成28年簡易生命表」（厚生労働省）によると、男の平均寿命は80.98年、女の平均寿命は87.14年となります。55歳の平均余命に55を足すと男は83.02歳、女は88.53歳、70歳の平均余命に70を足すと男は85.72歳、女は89.98歳となります。上記資金計画の想定平均年齢より平均余命の方がやや高いことになります。



下のグラフは、想定した年齢までにいくら必要か、金額の把握程度を聞いた結果です。大きな面積を「あまり把握していない」「把握していない」が占めています。「把握している+おおよそ把握している」の数値を比較すると

次世代シニア男性　22.0%
同　女性　17.0%
現在形シニア男性　37.0%
同　女性　32.0%

と、高齢期の生活を経験している現在形シニアのほうが把握度が高くなっているのは頷けます。

NEXT OLD ≠ NEW OLD

結びに。

●以上、ハイライフ研究所「次世代高齢者調査」の「家計・経済」に関する結果から、私見を交えご紹介してきました。調査結果の詳細につきましては、当ホームページにその全容がアップされておりますので、ぜひそちらもご覧下さい。
あらためて調査概要を紹介しますと下記の通りです。

・調査対象　東京３０㎞圏に在住の満51歳～75歳一般男女　・標本数　500　・標本抽出法　エリアサンプリング法
・調査方法　留置法（訪問して調査票配布→対象者記入→訪問回収　・調査時期　2016年10月・11月

●参考に全国を対象とした所得に関する公的データをご紹介しておきます。
理解を深める一助として下さい。

□世帯主の年齢階級別所得（出所　平成26年国民生活基礎調査・全国）
左数字　1世帯当たり（万円）　右数字　1人当たり（万円）

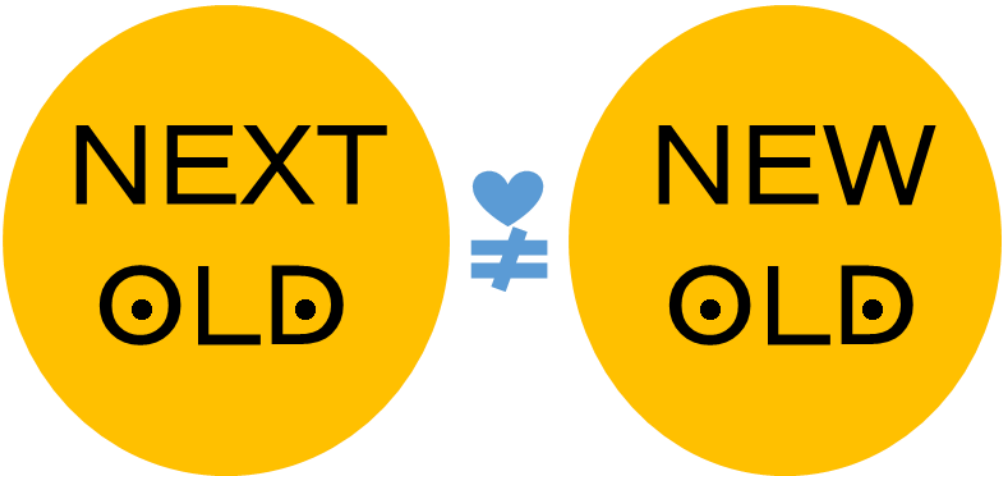
世帯主年齢		
50代	722.2万円	254.2万円
60代	532.3万円	212.2万円
70歳以上	396.0万円	183.1万円

●複数のインターネット検索エンジンで「老後」と入力してみて下さい。
「資金」「貯蓄」「破産」「賃貸」「に必要なお金」「の生活費」「の生き方」「趣味」「の楽しみ」「一人暮らし」などの言葉が検索窓に出てきます。
お金に関連するこの言葉の多さは、人々の「老後のお金」に対する関心の高さを物語っています。
また、「困らない老後のためにはいくら必要」といった記事や老後の資産形成指南本も多く見かけます。
しかし老後の資金について考えることはあっても、計画実行に至らないという人も多く見受けられます。
「いくら 必要か」は当然、人それぞれ。現状を把握し、情報を見極め、あまり悲観的にならず、楽観的に過ぎず、人と比べず、自分の人生を生きていくためにお金とどう付き合っていくか冷静に考えることが大切と思えます。最後までお読みいただき、ありがとうございました。

公益財団法人ハイライフ研究所
ホームページ「研究報告」欄にて公表中。
ぜひご一読下さい。

PHASE1
次世代高齢者研究報告書
変化し続ける高齢者意識の研究
～世代や年代の差異がもたらすもの～

NEXT OLD ≠ NEW OLD



Copyright©2017 Research Institute for High-Life

連載第十回予定

「楽しみ」（仮称）。

公益財団法人ハイライフ研究所